城の崎にて　　志賀直哉

教材のねらい

1　選定の理由

主人公が事故後の療養のために訪れた山陰の城崎温泉で目にしたものから、生き物の「生」と「死」を考える作品である。作者志賀直哉の実体験をもとにしている。主人公は、事故で死にかけるような目にあいつつも、生を得た自分を意識しながら、蜂やねずみ、いもりの生死の際を目撃する。既に死骸となった蜂には主人公は静かな死を思うが、死に際のねずみの生きようとする動騒を知り、自分の投げた石で偶然にいもりを殺してしまうに従い、考えは動揺しつつも、生と死は「両極ではなかった」という考えに至りつく。

生と死は、誰もが避けて通れない問題であり、近年の自然災害や新型コロナの流行以降、生が順当に続いていくものだという考え方は激変したと言える。生徒の年齢においては、身近な体験があればもちろんだが、観念的に考える機会も多いと思われる。日常的にふと思うような事柄を、主人公が生死について最終的に獲得した境地を通じて、一つの大きなテーマとして考える機会としたい。加えて、リアリズム文学の代表とされる本教材には、自分の考えの経緯を冷徹に観察し、書きつけようとする作家の強い意志を見ることができる。それを通じて、考える、書くという行為についても考えたい。

2　指導のねらい

文章は平易ではあるが、意味や論理が必ずしも明快でない部分もある。一つ一つの文章を丁寧に読み進めることで、創造的な読み方をするというよりは、文章の意味それ自体を読み取る練習をしたい。同時に、見たことや心情を表す表現の特色を把握したい。全体の明晰さは、感情の混乱も含めて冷徹に描写する強い態度によることを理解し、近代的なリアリズム文学の一つの事例であることを確認する。

(1) 具体的な表現に即して、主人公が観察・描写したものと、それにかかわる心情を読み取る。

(2) 主人公の心情の変化とその理由を、場面の状況や置かれていた立場などとの関係で明らかにする。

(3) 主人公の死生観について理解する。

(4) 主題を効果的に展開するための構成や表現、自分を観察する際の方法、心の動揺がリアルに伝わる表現の特色について考える。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア

(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ

(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ

(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ

(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア

(6) 「読むこと」において、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア

(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ

(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ

(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ

(10) 進んで内容や展開を的確に捉えることを学び、作品の特色をつかもうとし、学習課題に沿って、自分の見たものや感じたことを効果的に表現するための構成上の工夫について考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕